

夢の超特急で大阪万博の見物に行き、月の石を見て感動した理科少年だった私が本書を手にしたのは漠然と科学者を目指していた高校生の頃であった。当時は科学技術が世の中のすべての課題を解決し、夢のような未来が待っているという雰囲気の中であった。本書の題目から何か科学の「秘伝」が書いてあるのでは？と思ったのだが、残念ながらその当時はまだ本書を味わうまでには至らなかった。その後大学院を修了して企業の研究所で仕事をする事になり、子供の頃感じていた「科学技術万能」という妄想が無残にも打ち砕かれ、目の前に突きつけられた現実に対処療法的に対応するのが精一杯という状況に陥った。そんなときに何気なく書棚から取り出した本書に救われたのである。著者の中谷宇吉郎は言わずと知れた低温物理学の大家であり雪の結晶の分類や人工雪創成といった功績で知られた実験家である。中谷は読者に対して静かに語りかける。とにかく実験・観察を淡々に行い、自ら立てた仮説を検証すること。これが「科学」であると。また科学とは、きわめて限られた範囲の中でしか機能しない「方法」であって、自然界のすべてを解明しようなどということは人間の思い上がりであるとも説いている。なんだかとても多忙で研究も上滑りになりがちな昨今であるが、最先端の研究活動に明け暮れ、ともすれば自分の立ち位置に危うさを感じている大学院生や若手研究者に一読をお薦めする。科学者としての立ち位置を再確認する良いヒントになると思う。